様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３９０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０２３２

研究課題名（和文）連句作品を中心とした蝶夢俳諧の文学史的意義の解明

研究課題名（英文）Elucidation of the historical significance of the literary history of Renku that Chomu participated.

研究代表者
中森　康之（NAKAMORI, YASUYUKI）

豊橋技術科学大学・工学部・教授

研究者番号：８０３２０６０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　まず、蝶夢同座の連句作品を収集、翻刻した。その結果、田中道雄氏・玉城司氏・伊藤善隆氏が主として収集翻刻したものと合わせて、蝶夢同座の連句作品全193点の翻刻が揃った。
　次に、蝶夢同座の連句作品の分析を行った。その結果、美濃派ほど卑俗ではなく、かといって蕪村ほど高雅ではないものとして、日常生活における情の機微を描き、日常において生きる意味を与える表現行為という特徴が明らかとなった。これは田中道雄氏が解明した、近代俳句の源流としての蝶夢発句の表現的特徴と重なるものであり、芭蕉から支考、そして蝶夢へと継承された俳諧本質論に基づくものである。

研究成果の概要（英文）：　First, I collected and transcribed Renku Works that Chomu participated.
　Next, I analyzed the Renku Works that Chomu participated. As a result, I elucidated the essence of Expression characteristics as a meaning to everyday life. Furthermore, I clarified the Renku Works that Chomu participated were based on Basho-Shiko-Chomu's theory of haikai.

研究分野：近世文学

キーワード：蝶夢　連句

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで支考と美濃派を中心に研究を進めてきた。支考も美濃派も、俳諧研究における評価は極めて低く、堀切実氏らごく小数の研究者によって論じられた以外、ほとんど研究されてこなかったといっても過言ではなかった。それは支考の人間性が信用できず、支考や美濃派の作品は低俗で文学的価値が低いと評価されたからであった。

しかし、先入観にとらわれず、支考と美濃派をきちんと検討してゆくうちに、そのような評価は偏見に過ぎないことが分かってきた。近代的な文学観に囚われず、俳諧を庶民等の文化活動という視点で捉えたとき、支考と美濃派は、近世中後期以降の俳諧史において、極めて重要な役割を果たしていたことが明らかとなってきたのである。

例えば、「古池や」の句を「侘び・さび」と結びつけて解釈した上で、蕉風開眼の句として喧伝し流布させたのは支考と美濃派であった。近世中後期には、膨大な数の「美濃派風」作品が残されている。俳諧理念の点でも、俳風という点でも、近世中後期、そして近代俳句に大きな影響を与えたのは、支考と美濃派なのであった。

さて、そのような研究を進めてきた研究代表者の関心上に、一人の新たな俳人が浮上してきた。支考俳論を本質的に継承しながらも、美濃派とは別のかたちで近世中期以降の芭蕉理解、俳風に大きな影響を与えた俳人、蝶夢であった。

支考は、支考流に芭蕉を解釈し、それを俳論と美濃派を通じて全国的に流布した。蝶夢は、その支考俳論を独自の仕方で咀嚼し、流派を越えた俳人の結集を全国に呼び掛け、蕉風復興運動を通して、芭蕉を顕彰した。この両者が近世中期以降の俳諧史に大きな影響を与えていたのである。しかしその蝶夢も、支考と美濃派同様、俳諧研究においては、ほとんど顧みられなくなってしまっていた。

1938（昭和 13 年）、冨山房百科文庫に『芭蕉翁絵詞伝』が納められたのを最後に、俳諧研究において、蝶夢は忘れ去られた存在となってしまった。かろうじて在野の研究者高木蒼梧氏が、1972（昭和 47）年に義仲寺史跡保存会から『義仲寺と蝶夢』を上梓した程度である。

例えば、昭和 25 年～平成 17 年の連歌俳諧関係の研究論文は約 12,000 件ある（研究代表者共編『連歌俳諧関係研究文献総目録』2009）が、蝶夢を対象とした学術論文は皆無に近く、俳誌などに発表された論考も、高木のものを含めて 40 件余（0.3%）しかない。

もちろん蝶夢が忘れ去られたのにはそれなりの理由がある。最大の理由は、蝶夢の句集が出版されなかったことであろう。これまでの俳諧研究は、作品の「文学性」偏重主義であったため、近代から見て文学的に価値の高い句が知られている俳人、すなわち、芭蕉・蕪村・一茶・子規を中心に研究が進められてきたのである。

しかし「発句の文学性中心主義」から自由になった眼で見ると、蝶夢は全く違って見えてくる。近世中期の蕉風復興運動をリードし、芭蕉顕彰を牽引した俳人。芭蕉の句集や文集を編み、芭蕉の初めての伝記である『芭蕉翁絵詞伝』を著した俳人。その中で、今日では常識になっている「芭蕉の生涯は旅の生涯であった」というイメージを定着させたのも蝶夢であり、「芭蕉の作風は生涯をかけて変遷し、その変遷過程の把握を抜きには考えられない」という芭蕉理解を広めたのも蝶夢なのであった。つまり、今日の芭蕉理解や芭蕉以降の俳諧を考えるとき、蝶夢を抜きには考えられないのである。

そんな蝶夢が、自らの句集を一冊も刊行しなかったがゆえに、近年の研究から忘れ去られた存在となってしまっていたのである。

このような研究状況の中、田中道雄氏（佐賀大学名誉教授）は、蝶夢の重要性に早くから注目し、独自に資料を収集し続けておられた。そして 2013 年 6 月、田中氏と研究代表者および田坂英俊氏と共編で、『蝶無全集』（和泉書院）を上梓したのである。

さらにそれを踏まえ、平成 25 年度日本近世文学会春季大会において、田中道雄氏が「蝶夢の俳論の史的意義」と題した口頭発表を行ったところ、俳諧だけでなく、和歌や漢詩の研究者からも大きな反響を呼んだ（のち「発句は自己の楽しみ―蝶夢の蕉風俳諧理念の新しさ」（「文学」2014 年 9,10 月号　岩波書店））。

ようやく、これまで忘れ去られていた存在であった蝶夢理解が、今、研究上の大きな課題として認識されはじめ、田中道雄氏によって、大きな問題提起がなされたのである。

ところで、田中道雄氏の論考は、蝶夢の俳論を手がかりに、発句の表現の特徴と表現史的意義を明らかにしたものであった。そこで、さらに蝶夢の文学史的意義を解明するためにどうしても必要となるのが、『蝶夢全集』に収められず、田中氏も論考で触れなかった、蝶夢の連句作品の収集と分析なのであった。

２．研究の目的

芭蕉句集、芭蕉文集を編纂し、初の芭蕉伝記を著すなど、近世中期における芭蕉顕彰の中心的存在であった蝶夢は、自身の作品においても、それまでとは一線を画す、近代俳句の源流とも言える斬新さをもっていた。蝶夢を境に、俳諧は大きく変化したのである。これは俳諧だけの問題ではない。和歌や漢詩も含め、この時代を一つの転換点と見なすことによって、「近世/近代」というこれまでの日本詩歌史とは違った、新しい日本詩歌史を構想することができるのである。

本研究はそのような全体構想の中、蝶夢の連句作品を収集し、それを具体的に分析することによって、その俳諧史的意義・詩歌史的

意義を解明しようとするものである。

３．研究の方法

本研究では蝶夢同座の連句作品について、下記の方法を用いた。

(1) 作品の収集

田中道雄氏作成の、「蝶夢同座の連句目録」（『蝶夢全集』所収）を手がかりとして、現在知りうる限りの全ての蝶夢同座連句を調査し、複写または画像データを収集する。

。

(2) 翻刻

収集した蝶夢同座の連句作品を、全て翻刻する。ただし、玉城司氏、伊藤善隆氏が翻刻された蝶夢同座の連句作品については、それを共有させて頂くこととする。

(3) 分析

収集、翻刻した蝶夢同座の連句作品を分析する。分析は、作品それ自体の特徴（作風、趣向、付け方等）の他、蝶夢の発句や俳論との関連性、蝶夢以前・以後の連句作品との比較、和歌や漢詩等の韻文や絵画などの文化史との関係性等も視野に入れ、蝶夢連句の文学史的意義の解明へと繋がるように行う。なお、連句の分析には、連携研究者が蕉風連句の分析のため開発した分析手法を援用することとする。

４．研究成果

まず平成 28 年度までに、かねてより研究上の連携をしている田中道雄氏・玉城司氏・伊藤善隆氏が主として収集翻刻されたものと合わせて、現在知られている蝶夢同座連句作品 193 点全ての翻刻をおこなった（田中道雄氏作「蝶夢同座の連句目録」に採録されているもの以外に、新たな作品は発見できなかった）。これら全ての蝶夢同座連句作品は、田中道雄・田坂英俊・玉城司・中森康之・伊藤善隆編著『蝶夢全集　続編』（仮称、和泉書院、平成 31 年刊行予定）に掲載予定である（入稿済）。

最終年度である平成 29 年度は、これらの連句作品の分析を行った。その結果、芭蕉―蕪村―一茶という頂点中心主義の俳諧史では捉えられなかった新しい俳諧の表現史が浮き彫りになってきた。

それはこういうことである。蝶夢の発句が「内発的感情の重視、詠句の生活への取り組み」という点で、近代俳句の源流と認められることは、既に田中道雄氏に詳しい論考がある（「発句は自己の楽しみ―蝶夢の蕉風俳諧理念の新しさ」）。

今回の研究で、やはり連句作品においても、同様の特徴が認められることが明らかとなった。それは大きく言えば、美濃派ほど卑俗ではなく、かといって蕪村ほど高雅ではないものとして、日常生活における情の機微を描く表現行為とでも言えるものである。

これは、研究代表者が従来明らかにしてきた、芭蕉から支考へ、支考から蝶夢へ継承された俳諧本質論に基づく、俳諧の表現理論に裏打ちされたものであり、俳諧を狭い意味での文芸ではなく、広く日常生活において生きる意味と価値を与える文化活動として俳諧を意味付けるものである。そしてさらには、それに基づいた新しい俳諧史、文学史を可能にするものである。

また、既に田中道雄氏が明らかにしたように、蝶夢の発句は、近代俳句の源流ともいえる斬新さ（装飾を廃し事実の通りに詠む、感情の内発性の絶対化、趣向の疎隔化等）をもち、俳諧史にとどまらず、日本詩歌史、世界詩歌史の中で意義づけられるものである（田中道雄氏執筆「文人僧蝶夢―その事績の史的意義」（『蝶夢全集』「解題」）が、それに連句を加えて、蝶夢の表現理論と方法として考えることを可能にするものである。

さらに他領域とも関係づけて述べれば、「近世/近代」というこれまでの俳諧史・日本詩歌史を、蝶夢とその時代を転換的として再構築できる可能性を開き、例えば鈴木健一氏の「江戸詩歌史覚書―時代区分とジャンルの越境について―」（「日本文学」2011 年 10 月）における提言にも通じるものである。その意味で、俳諧史、詩歌史にとどまらず、ジャンルをこえた表現史へと展開できるものなのである。

なお、連句ということに焦点を当てて言えば、この後、連句はそれほど盛んに行われなくなり、俳諧の活動は発句中心となり、いわゆる近代以降は、一部を除いて、俳諧史は俳句史となってゆく。このことの意味は、別途詳細に考察する必要があり、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

① 田中道雄、田坂英俊、玉城司、<u>中森康之</u>、伊藤善隆、翻刻　方壺宛て蝶夢書簡五十通（下）―付「竹村方壺雑集」に収める蝶夢諸資料―、ビブリア、査読無、147 号、2017、pp.58-81

② 田中道雄、田坂英俊、玉城司、<u>中森康之</u>、伊藤善隆、翻刻　方壺宛て蝶夢書簡五十通（上）―付「竹村方壺雑集」に収める蝶夢諸資料―、ビブリア、査読無、146 号、2016、pp.24-49

③ <u>中森康之</u>、第三の「俳諧條々」、俳文学研究、査読無、63 号、2015、pp.3-4

〔学会発表〕（計　1 件）

① 中森康之、蝶夢校『俳諧十論発蒙』二種、俳文学会第 67 回全国大会、2015

〔図書〕（計　3 件）

① 中森康之、ぺりかん社、芭蕉の正統を継ぎしもの　支考と美濃派の研究、2018、336

② 中森康之 他、森話社、江戸の学問と文藝世界、2018、pp.129-150

③ 中森康之 他、ぺりかん社、近世文学史研究 第 2 巻 十八世紀の文学―学び・戯れ・繋がり―、2017、pp.63-85

〔その他〕
ホームページ等
http://las.tut.ac.jp/~nakamori/

６．研究組織
(1)研究代表者
中森　康之（NAKAMORI, Yasuyuki）
豊橋技術科学大学・工学部・教授
研究者番号：80320604

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
佐藤　勝明（KATHUAKI, Sato）
和洋女子大学・人文学部・教授
研究者番号：60255172

(4)研究協力者
(　　)